

ウクライナーボスニア：国が消えて国境が残る物語

三 谷 恵 子

1. アレクサンダル・ヘモンの『ラザルス・プロジェクト』

現代アメリカの作家アレクサンダル・ヘモンの小説『ラザルス・プロジェクト』⁽¹⁾は、100年前のシカゴで始まる。1908年のある日、シカゴ警察署長宅を訪れた青年が、無政府主義者と間違われて署長に射殺されてしまう。青年の名はラザルス・アヴァーブク、モルドヴァのキシナウで頻発したボグロムを逃れ、ウクライナを経てアメリカにやってきたユダヤ系移民の若者だった⁽²⁾。この冒頭の事件から、すぐに話は現代へと展開する。主人公のブリクは、アメリカ研修中に祖国の戦況悪化で難民となったボスニア人で、シカゴに住み新聞のコラムニストとしてわずかな収入を得ている。ある時彼は、ラザルス・アヴァーブクの事件を知って関心を持ち、真相を解明して本にすべく、研究プロジェクトを申請する—「100年前、シカゴ警察に射殺されたユダヤ人移民について書きたいと思ってまして（…）いや、僕はユダヤ人じゃありません。ムスリムでも、セルビア人でも、クロアチア人でもありません。僕はちょっとややこしいんです。（…）ボスニア人ていうのは、民族じゃなくて、国籍なんです—話せば長くなりますが、僕のひいじいさん、ひいばあさんが、オーストリア＝ハンガリー帝国に併合されたボスニアに移住した人たちです。1世紀も前の話ですよ、帝国はとっくに消えています。わけがわからない、でしょう。だからこの本を書きたいんです」—ブリクの曾祖父母の出身地はウクライナ、つまりブリクはウクライナにルーツをもつボスニア人なのだった。申請が採択された彼は、その助成金で、ボスニアから来た旧友ロラと調査の旅に出る。現代のブリクと100年前のラザルスの物語が、章の間に挿入された写真に導かれて交互に展開し、ブリクたちの旅は、アメリカへ渡るラザルスの旅と重なりつつ、彼らの祖国ボスニアまで続いていく。

ここに登場するブリクは、ボスニア出身の作者ヘモン自身の姿でもある。1992年、短期留学生としてアメリカに滞在していたヘモンは、ボスニア戦争の悪化で帰国できなくなり、そのままシカゴに居を定め、ゼロからプロの作家としての人生を歩き始めたという経歴を持つ。そして曾祖父母は、ウクライナからやってきた移民。祖国を離れて異国へ移住した祖先、その祖先が見つけた新たな祖国を意に反して離れざるを得なかった自分—祖国喪失の連鎖は運命的でさえあるが、そもそもヘモンやブリクの祖先はどうしてボスニアに来たのか。ウクライナとボスニアはいったいどうつながるのか。以下はブリク—ヘモンの同胞ともいえるべき、ボスニアのウクライナ人の話である。

2. ガリツィアのウクライナ人

‘ガリツィア’は現在のウクライナの一地方—ポーランドとルーマニアの間を西に伸びるあ

たりーを指す歴史的名称で⁽³⁾、キエフ・ルーシ時代のハリチ公国、のちのハリチーヴォリヌイ公国にその領域と名称の起源をもつ。古いハリチ公国のなごりはハリチナという地名に残され、この地域の中心都市リヴィウ⁽⁴⁾は、14世紀の年代記にすでに言及のある歴史の長い町である。しかしハリチ公国は14世紀末にはポーランドに併合され、‘ルシ州’ (Województwo Ruskie) あるいは‘チェルヴォナ (赤い) ルシ’ (Ruś Czerwona, Червона Русь) とも呼ばれる地となった。さらに後には、1772年の第一回ポーランド分割によってオーストリア領ガリツィアとなるが、ただしオーストリア領ガリツィアという場合には、この歴史的ガリツィア=ハリチナに加え、現在のポーランド南東端の一部も含まれる。このためオーストリア時代 (1772～1918) のコンテクストでは、歴史的ガリツィアについては‘東ガリツィア’ とされることもある⁽⁵⁾。

ちなみにこの地の運命はさらにその後の東欧の変動とともに変わり、ロシア革命時代には、はじめて‘ウクライナ’の名称を冠した‘西ウクライナ人民共和国’ (Західноукраїнська Народна Республіка)、大戦間は再びポーランド領‘東マウオポルスカ’ (Małopolska Wschodnia)、第二次大戦後は‘西ウクライナ’となる⁽⁶⁾。

ここで話題とするガリツィア—上に述べた意味の歴史的ガリツィアでありオーストリア時代の東ガリツィア—には、古くよりウクライナ人が住み⁽⁷⁾、19世紀中頃には人口のほぼ70%を占めていた。ただしそのほとんどは農民層に属し、都市文化はおもに、人口的少数派のポーランド人、ユダヤ人によって担われていた⁽⁸⁾。

このガリツィアのウクライナ人について語る場合、忘れてならないのが、1596年のブレストーリトウスク合意によって作られたギリシャ・カトリック教会⁽⁹⁾の存在である。ギリシャ・カトリック教会は、バチカンを頂点とするカトリック教会の傘下に入りながら、典礼様式においては東方正教会の伝統を踏襲するという、東西キリスト教会の折衷として作られたものである。東西教会の合同という試みはこれに先立つ時代にも行われているが、16世紀末のポーランド領内においてこれが実現した背後には、当時の東西キリスト教会と世俗権力をめぐる諸状況がある。すなわち、カトリック圏ポーランドにおいては、宗教改革と対抗宗教改革の抗争、ヤギェオ朝の終焉によるポーランド国の政治的変質、カトリック支配の拡大を望むジグムント三世の登場があり、いっぽう東方教会圏においては、オスマン支配下でのビザンツ総主教座の弱体化と、これに相反して台頭するモスクワ府主教座の、総主教座への格上げがあった。カトリック権力の基盤を固め、ポーランド—リトアニア国内の正教徒に対するモスクワからの影響を阻むためには、領内正教会のカトリック組織への併合がポーランド国にとって必須の課題だったのである⁽¹⁰⁾。

政策的に作られたこの合同教会だったが、宗教的寛容性を示したオーストリア時代のガリツィアでは国家の保護を受け、神学校がリヴィウに設立されて聖職者の育成が行われた。1784年にはやはりリヴィウにギリシャ・カトリック信者の子弟のための学舎を含むガリツィア初の大学が設立され、エリート形成の道も開かれた⁽¹¹⁾。こうしてガリツィアのギリシャ・カトリック教会は、ここに住むウクライナ人の後々のアイデンティティー形成にきわめて重要な要素と

なった。次に述べるように、19世紀後半バルカンでオスマン帝国が撤退し始め、ボスニアがオーストリア支配下にはいると、ガリツィアからボスニアへの移住が始まるが、その移住者たちは、祖国を離れても彼らの教会と分かつたことはなかったのである。

3. ウクライナからボスニアへ

1878年のベルリン会議の結果、オーストリア帝国はそれまでオスマン帝国領であったボスニアの管轄権を獲得し、実質的領地とした。ここでボスニアとガリツィアの間に、同じオーストリア帝国内の地方という関係が生まれる。そしてこれ以後、ガリツィアからボスニアへと、ウクライナ人の移住が行われた。冒頭のブリクヤその実像であるヘモンの曾祖父母たちは、この中にいたはずだったのである。

もちろんオーストリア時代のボスニアには、ガリツィアばかりではなくハプスブルク領内のあらゆる地域からの移住が推進された。ここで、このことを示すユーゴ時代の統計資料を一瞥しておこう⁽¹²⁾。

Table 2.6 Results of the Bosnian Census (1961–1991)¹³

	1961		1971		1981		1991	
	In Numbers	In Percent						
Muslims ¹⁴	842,248	25.7	1,482,430	39.6	1,630,033	39.5	1,902,956	43.5
Serbs	1,406,057	42.9	1,393,148	37.2	1,320,738	32.0	1,366,104	31.2
Croats	711,665	21.7	772,491	20.6	758,140	18.4	760,852	17.4
Yugoslavs	275,883	8.4	43,796	1.2	326,316	7.9	242,682	5.6
Montenegrins	12,828	0.4	13,021	0.4	14,114	0.4	10,071	0.2
Gypsies/Roma ¹⁵	588	0.0	1,456	0.0	7,251	0.2	8,864	0.2
Albanians	3,642	0.1	3,764	0.1	4,396	0.1	4,925	0.1
Ukrainians ¹⁶	–	–	5,333	0.2	4,502	0.1	3,929	0.1
Slovenes	5,939	0.2	4,053	0.1	2,755	0.1	2,190	0.1
Macedonians	2,391	0.1	1,773	0.1	1,892	0.1	1,596	0.1
Hungarians	1,415	0.1	1,262	0.0	945	0.0	893	0.0
Italians	717	0.0	673	0.0	616	0.0	732	0.0
Czechs	1,083	0.0	871	0.0	690	0.0	590	0.0
Poles	801	0.0	757	0.0	609	0.0	526	0.0
Germans	347	0.0	300	0.0	460	0.0	470	0.0
Jews	381	0.0	708	0.0	343	0.0	426	0.0
Russians	934	0.0	507	0.0	295	0.0	297	0.0
Slovaks	272	0.0	279	0.0	350	0.0	297	0.0
Turks	1,812	0.1	477	0.0	277	0.0	267	0.0
Romanians	113	0.0	189	0.0	302	0.0	162	0.0
Ruthenians ²	6,136	0.2	141	0.0	111	0.0	133	0.0
Other	811	0.0	602	0.0	946	0.0	17,592	0.4
Ethnically undeclared	–	–	8,482	0.2	17,950	0.4	14,585	0.3
Regional affiliation	–	–	–	–	3,649	0.1	224	0.0
Unknown	1,885	0.1	9,598	0.1	26,576	0.7	35,670	0.8
Total	3,277,948	100.0	3,746,111	100.0	4,124,256	100.0	4,377,033	100.0

この表は、ユーゴ時代のボスニアの人口を民族的帰属別に示したものである。最上段にあるMuslims ‘ムスリム’ は、現在ボシニャク人としてボスニア連邦の主要民族となっている人々であり、以下ユーゴ本来の構成民族—セルビア人、クロアチア人など—が続くが、それ以外にも、ウクライナ人を筆頭にハンガリー人、イタリア人、チェコ人、ポーランド人、ドイツ人、スロヴァキア人、ルーマニア人、ルシン人など多くの民族が申告されていることがわかる。

かつてのオーストリア帝国の図版を思い浮かべれば推測できるように、このほとんどが、オーストリア時代の移住政策によってこの地へやってきた集団の子孫たちだった。

ガリツィアからのウクライナ人の移住は、オーストリア政府の政策によって1890年から始まり、1910年を頂点として、第一次世界大戦終結時まで続いた。移住が実施されはじめて間もない1894年のある記録には「むこうでは無償で土地が与えられ、税が免除されるという評判も広まって、東ガリツィアのいくつかの郡から、ボスニアへの集団移住が行われている」とある⁽¹³⁾。実際には、移住先の土地を10年間、破格の賃貸料で使用することができ、この間賃貸料を支払えばその後は無償で利用できるというものだったが、それでもガリツィア社会の底辺にいた人々にとっては好ましい条件だったといえるだろう。移住は農民層から始まり、そのほかの職種にも広がって、1910年にはボスニア全体で8136人の‘ギリシャ・カトリック人’が登録されるまでになった⁽¹⁴⁾。主な移住先はボスニア北部、現在はスルプルカ共和国に位置するバニャ・ルカとその周辺で、今もウクライナ人たちはこの一帯に集中して住んでいる。ギリシャ・カトリック教会の活動も組織的に行われ、1900年には、集中移住地域であったプルニャヴォルとデヴェティナを管轄する教区が設けられ、教会の建設も着手されて、1903年に最初の教会がデヴェティナに建てられている⁽¹⁵⁾。

ボスニア内のウクライナ人の数は、第二次世界大戦の影響で減少したが、それでも1948年の統計では7883人がウクライナ人という民族的所属を表明していた⁽¹⁶⁾。

4. ボスニアのウクライナ人

1992年から95年まで続いたボスニア戦争は、この地のウクライナ人たちにも深刻な影響をおよぼした。ウクライナ人たちにとって精神的に重要であった地元のギリシャ・カトリック教会が破壊される被害もあり、1992年に多くのウクライナ人が国外へ脱出した。正確な数はわからないものの、ボスニアに残ったのは3000人ほどとされる。

移住ウクライナ人の間では、家庭や教会、コミュニティでウクライナ語が継承されて今に至っているが、組織的な文化活動が活性化するのは、ボスニア全体が復興に向かい、欧州統合への道をめざして、少数民族の権利保護を含むさまざまな法制度が整備される2000年以降である。2003年には、欧州評議会が定める『少数民族保護のための枠組み協定』を直接反映するものとして、民族的少数者のための保護法が制定され、先の表に示されている諸民族—もちろんウクライナ人もここに含まれる—がその対象民族とされた。これを受け、スルプスカ共和国では、少数民族連合 (Savez nacionalnih manjina Republike Srpske) が設立され、ウクライナ人をはじめ11の少数民族団体が加盟した⁽¹⁷⁾。また2010年には、やはり欧州評議会によって策定された『地域言語または少数言語のための欧州憲章』の批准にこぎつけ、上記の少数民族保護法で定められた少数民族の言語保全と育成のための諸対策が講じられることになった。こうしたことを受けて、民族の記憶を残す試み、あるいは民族的行事の活性化が促進され、たとえば2008年には、20世紀初頭の移住期にバルカン初のウクライナ人学校が設けられたリシニャ村

に、この設立から100年を記念した記念碑が設けられた。

移住から1世紀以上を経て、その間に三つの戦争—二つの世界大戦と20世紀最後に起きたボスニア戦争—をくぐり抜け、現在もお移住ウクライナ人たちは、彼らの民族的帰属意識とウクライナ語を維持している。ウクライナ人が同時期の多くのほかの移住者たちと比べて異なる点があるとすれば、それはまさにこの言語維持にあるといえるだろう。上記の2010年に批准された『地域言語および少数言語のための欧州憲章』の実務文書にも、保護対象となる少数言語の中で、じっさいに今も日常的に用いられているのはウクライナ語とイタリア語のみと記述されている⁽¹⁸⁾。

1930年代から比較的最近まで、本国ウクライナとの直接的な関係はほとんどなかったという彼らが、地元のボスニア人やセルビア人に同化されることなく（とはいってももちろん今のウクライナ人は皆、現地の言葉もふつうに話す）、ウクライナ語を使い続けて今日に至った要因はいくつかあるが、その中でもとくにギリシャ・カトリック教会の存在は大きかったと考えられる。コミュニティが教区であり、そこにウクライナ語でミサを行う教会がある。ウクライナ語を教える教室も併設される。ウクライナ語はユーゴ時代を通して、家庭内ばかりではなく、地元では公的な領域で使用される環境にあったのである。

ちなみに—というより言語学者のはしくれである筆者にとっては、じつはこちらが最大の関心事なのだが—彼らのウクライナ語は、ウクライナ方言学からいえば、‘南西方言’と分類される方言に含まれる言葉である。この方言は、標準ウクライナ語に比較的近いとされ、筆者が問い合わせたウクライナ人協会代表のアンドリヤ・スヴァトク氏も、ウクライナ本国の親戚との会話にほとんど不自由を感じないという。とはいえもちろん、この南西方言には音韻から文法の諸レベルに固有の特徴があり、とくに語彙には、北ロシア方言と共通する古い層がある一方で、ガリツィアの歴史を反映してポーランド語やルーマニア語、ドイツ語、ハンガリー語、スロヴァキア語などからの借用語も見られるとされる⁽¹⁹⁾。こうしたウクライナ語の方言が、南スラヴ語の中に100年あってどのような変化を見せているのか、これからも言語の継承は可能なのか。これを明らかにするのは、筆者のこれからの課題である。

おわりに

中欧は、さまざまな国が現れては消え、国境が書き換えられて歴史が作られてきた地域である。国が消えれば政治的な国境も消える。けれどもかつての国境はいつもどこかに残される。20世紀の世界に存在したソ連邦という大国は消えたが、その国境はじつにさまざまな状況の中で世界地図の上に浮かびあがってくる。バルカン半島にあったユーゴスラヴィアも消え、ボスニアはそこから独立国として浮上する間もなく分裂した。オスマン帝国のボスニア州に由来する国は消え、セルビア人とボシニャク人をへだてる国境だけが残された。ヘモンヤブリク、また100年前のラザルスのような人々にとっては、国—祖国は失われても、祖国とそのまわりの世界をへだてる国境は残されたままである。けっきょく、国は消えても国境は人の心に、文化

の中に、あるいは新たにできた国のどこかに、残る。

2013年11月のユーロマイダンを始まったウクライナの混乱は、2014年にはいって、ロシアとの対立も絡んで緊迫を増し、ロシアと欧米のさまざまな関係や、国際的な安全保障のあり方にも深刻な影響をおよぼす様相を見せてきた。ロシアと起源的な文化を共有しながらも、その後の数百年の間に対抗と共存の複雑な関係を形成し、20世紀においては共産主義連邦国家の中でロシアとともに地上に存在したウクライナ。この国が独立後四半世紀たって分裂と内戦の様相を示していくいっぽうで、25年前にあまりにも大きな犠牲を払って独立したボスニアは、いまなお再統一の道をはたせず、政治的機能不全の状態の中にいる。

ボスニアに住むウクライナ人のスヴァトク氏は、自らボスニア戦争の体験者でもあり、遠い祖国—そこには親戚もいる—の状況を、かつての自分たちに重ねて見てしまうという。そして「とにかくウクライナがボスニアのようになってほしくない、毎日そう思ってウクライナのテレビを見ています」と語る。ボスニアの失敗は、当時の国際社会の対応の失敗でもあった。いまのウクライナ問題に対して、国際社会はボスニアから学んだ教訓をどこかに生かせるのか。ウクライナとボスニア、どちらも国が国としてあることのむずかしさを私たちに示している。

註

- (1) Hemon, Aleksandar. 2008. *The Lazarus Project*. New York: Riverhead Books.
- (2) この事件は実際に1908年シカゴで起きたもので、当時社会問題化した：Roth, Walter & Joe Kraus. 1998. *An Accidental Anarchist: How the killing of a humble Jewish immigrant by Chicago's chief of police exposed the conflict between law & order and civil fights in early 20th-century America*. San Francisco, CA: Rudi Pub.
- (3) 英語表記で Galicia、ドイツ語 Galicien、ウクライナ語 Галичина ‘ハリチナ’。
- (4) Львів、ロシア語では Львов ‘リヴォフ’。
- (5) Magocsi, Paul Robert. 1983. *Galicja: A Historical Survey and Bibliographic Guide*. Tronto: University of Tronto Press, xv. なお‘東ガリツィア’はドイツ語で Ost-Galizien、ウクライナ語で Східна Галичина。
- (6) Magocsi, *Galicja*, xvi.
- (7) ウクライナ人たちが古く用いていた呼称は‘ルシン’ (Rusyn) だが、ここでは一貫してウクライナ人という名称を用いる。
- (8) Magocsi, *Galicja*, p.94.
- (9) Греко-Католицька церква、英語で Greek Catholic Church、日本ではユニエイト教会、東方典礼カトリック教会などともされる。
- (10) プレヒト合同についてより詳しくは森安達也『東方キリスト教の世界』山川出版社1991、168-198.
- (11) Magocsi, *Galicja*, pp.94-95.
- (12) Bieber, Florian. 2006. *Post-war Bosnia: Ethnicity, Inequality and Public Sector Governance*. Houndmills, Basingstoke, Hampshire: Palgrave Macmillan, p.15 より転載。
- (13) Качараба С., Рожик М. Українська еміграція. Еміграційний рух зі східної Галичини та північної Буковини у 1899-1914 рр. Львів; 1995. С.91.
- (14) Busuladžić, Andan. 2003. “Grkokatoličko stanovništvo u BiH” *Časopis za suvremenu povijest*,

God. 35, broj, 1. 173-188, str.178.

- (15) Качараба, Степан. 2008. Суспільна опіка Греко-католицької церкви над Українською еміграцією у Боснії та Герцеговині (кінець XIX - початок XX ст.) UKRAINE EUROPE WORLD The International Collection of Scientific Works Founded in 2008 Issue 1: <http://www.uk.xlibx.com/4pedagogika/72459-1-ukraine-europe-world-the-international-collection-scientific-works-founded-2008-issue-ternopil-2008-ministe.php> [2015 年 1 月 1 日アクセス]
- (16) Busuladžić, "Grkokatoličko stanovništvo", str. 181.
- (17) <http://www.snm.rs.ba/index.php?idsek=227>
- (18) Bosnia and Herzegovina. Initial report presented to the Secretary General of the Council of Europe in accordance with Article 15 of the Charter. Strasbourg, 30 July 2012.
- (19) Жилко Ф.Т. Нариси з діалектології української мови. Київ;1955. С.109.